

日本環境教育学会関西支部第11回研究大会 第2回日中環境教育情報交流シンポジウム開催にあたって

谷口 文章

関西支部長・日中環境教育情報交流協会会長

今回の大会は、日本環境教育学会関西支部におきましては、第11回研究大会となり、「地球環境と世界市民」国際協会におきましては、第2回日中環境教育情報交流シンポジウムとなります。

関西支部の研究テーマは、第8回の「関西のネットワーク作り」（1999年 於：甲南大学）、第9回の「社会的公正、自然環境の持続、主体的なかかわり」（2000年 於：京都精華大学）、第10回の「地域とくらしをかえる環境教育」（2001年 於：神戸商科大学）の流れがありました。第11回では、ネットワーク、持続可能性、地域というキーワードをふまえながら、国際的な視点から日本と中国のネットワークの構築を論議することになりました。

今回は、持続可能な循環型社会をめざして、「関西」という地域から、パートナーシップによる「国際」的なネットワーク化を試みることを目指しております。

午前中は従来通り研究発表、昼からは中国の先生方に入ってください、シンポジウム「日本と中国における環境教育のパートナーシップ」を開催いたします。また懇親会にもご参加いただきまして交流を深めたく考えております。

多数の皆様のご参加をお待ちしております。

（2002年11月30日）

大会プログラム

- 9:15 受付 甲南大学10号館
- 9:45 研究発表（10号館）
A分科会（1021教室）「総合的な学習の時間」
B分科会（1022教室）「一般研究発表」
C分科会（1012教室）「一般研究発表」
- 11:45 昼食
- 12:45 開会挨拶・ゲスト紹介 谷口文章氏（関西支部長・日中環境教育情報交流協会 会長）
池上吉藏（甲南大学 理事長）
- 13:00 特別講演（甲友会館大ホール）
王宗敏氏（天津市教育科学研究院 原院長）
「中国の小・中学校における環境教育の概要」
- 14:00 休憩
- 14:20 第2回日中環境教育情報交流シンポジウム（甲友会館大ホール）
- 日本と中国における環境教育のパートナーシップ -
【研究報告、シンポジスト意見交流、会場との座談会】
コーディネーター：谷口文章氏（甲南大学 教授）
シンポジスト：
田徳祥氏（北京大学 教授）
「中国の大学における環境教育の現状について - 総合的学習の視点から -」
宋豫秦氏（北京大学 副教授）
「私の考える砂漠化と黄沙あらし問題 - 総合的学習としての環境考古学の立場から -」
王宗敏氏（天津市教育科学研究所 原院長）
「中国の学校教育における環境教育」
浅野能昭氏（環境省環境教育推進室 室長）
「日本における環境教育政策 - 日中のパートナーシップ -」
和田武氏（立命館大学 教授）
「大学における副専攻『環境論コース』の教育実践 - 大学での総合的環境教育の試み -」
本庄真氏（香芝市立真美ヶ丘東小学校 教諭）
「小学校における環境教育の総合的学習 - 『川と人びとの暮らし』の実践から -」
【通訳】 金世柏氏（中国中央教育研究所 名誉研究員）
- 17:50 閉会挨拶
- 18:00 懇親会（会場：甲南大学生協レストラン）

一般研究発表プログラム

< A会場 : 1021 教室 > テーマ「総合的な学習の時間」座長 : 木内 功、赤尾整志

- A-1) 9:45 ~ 10:05 藤岡達也(大阪府教育センター)
「環境教育・学習をすすめるためのパートナーシップ構築についての一考察」
- A-2) 10:05 ~ 10:25 杉本史生(京都大学大学院)・藤岡達也(大阪府教育センター)
「大阪府の環境学習人材支援事業にみる新たな環境教育の展開
- 学校とNPO等・一般行政との連携システムの構築に向けて - 」
- A-3) 10:25 ~ 10:45 好廣眞一(龍谷大学) 土屋和三(龍谷大学) 増田啓子(龍谷大学)
「『龍谷の森』保全の経過と環境教育への利用 - オオタカのすむキャンパスづくり」
- A-4) 10:45 ~ 11:05 松井克行(大阪府立西淀川高校)
「大気汚染公害訴訟の教材化 - 四日市、西淀川から東京、尼崎まで」
- A-5) 11:05 ~ 11:25 吉岡 学(長岡京市立長岡第六小学校)
「<総合的な学習の時間>における環境教育と人権教育の融合とその試み」
- A-6) 11:25 ~ 11:45 岩本 泰(東京学芸大学連合大学院)・小澤紀美子(東京学芸大学)
「学校教育における『持続可能性のための教育(Education for Sustainability)』のための基礎研究 - 狭義『環境教育』から日本型『持続可能性のための教育』への展望と課題 - 」

< B会場 : 1022 教室 > テーマ「一般研究発表」座長 : 福島 古、岡村悦治

- B-1) 9:45 ~ 10:05 天野雅夫(神戸商科大学)
「温暖化政策の研究 - 日本と英国を比較して」
- B-2) 10:05 ~ 10:25 渡辺りわ(甲南大学)
「環境教育における実践倫理 - 生命倫理と環境倫理の理論的枠組み - 」
- B-3) 10:25 ~ 10:45 山田弘司(大阪市教育振興公社)
「信太山湿地群の自然と環境教育」
- B-4) 10:45 ~ 11:05 田先崇志(兵庫県立西脇高校)
「播磨地域の紫外線量(UV-B)の測定から」
- B-5) 11:05 ~ 11:25 月出修司(奈良教育大学)
「アヒル橋における子どもの遊びと意識調査」
- B-6) 11:25 ~ 11:45 山田悦子(山田技術事務所)
「写真を活用した環境教育教材 ~ 身近な生き物を対象として ~ 」

< C会場 : 1012 教室 > テーマ「一般研究発表」座長 : 森家章雄

- C-1) 9:45 ~ 10:05 飯尾美行(静岡県立浜松城北工業高校)
「“ものづくり”と環境教育」
- C-2) 10:05 ~ 10:25 清水 実(東京都三鷹市立第七中学校)
「身近な河川を利用した探究活動の工夫 - 多摩川支流『野川』を通して - 」
- C-3) 10:25 ~ 10:45 楠てるみ(甲南大学)
「学校現場に環境教育をどう取り入れるか」

発表時間 20分間(12分1鈴[予告] 15分2鈴[報告終了] 20分3鈴[発表終了])
発表者の方は発表時刻30分前までに各教室で利用機材(スライド・OHP・パワーポイント
ファイル[CD-ROMに焼いたもの])資料を会場係にお渡しください。

特別講演

中国の小中学校における環境教育の概要

王 宗敏

天津市教育科学研究員原院長・天津市教育科学研究院研究員（教授）

原院長学求委員会主任 1936年10月5日生

一．中国環境教育成立と発展

- 1 .中国では改革解放の政策を実行して以来、経済発展に伴い環境問題は日ごとに厳しくなってきた。議論をたたかわす問題は、環境と発展との関係・人間と自然との関係である。
- 2 .環境保全は基本的国策であることは明らかに強調されている。

二．中国における小・中学校の環境教育の在り方

- 1 .子どもの環境教育をめぐる状況
- 2 .総合的学習について具体的な事例の紹介

三．現実に直面するいくつかの問題点

シンポジウム

「日本と中国における環境教育のパートナーシップ」

シンポジウム

日本と中国における環境教育のパートナーシップ

コーディネーター

谷口 文章

関西支部長・日中環境教育情報交流協会会長

今回は日本環境教育学会と「地球環境と世界市」国際協会の両方の組織が共催する形で、「日中のパートナーシップによる環境教育 - 総合的学習をめぐって - 」が開催されます。

第1回の日中環境教育情報交流シンポジウム（関西支部、国際協会共催）は、1999年8月に北京大学において開かれ、日本と中国のパートナーシップの最初の機会となりました。考えてみれば両国の関係も深くまた長いものでありますが、今回のように定期的に文化交流がなされ、さらに続けられることが期待されます。

今回の大会テーマにそって、日本と中国とのパートナーシップ、総合的学習における環境教育情報交流を展開する予定です。王宗敏先生に、中国における環境教育の総合的学習について御講演いただいた後、中国側から宋豫秦先生、田徳祥先生より中国側の環境教育の取り組みについての研究報告、日本側から環境省の浅野能昭氏に環境政策におけるパートナーシップによる環境教育の取り組み、和田武氏に日本の大学における取り組み、本庄真氏に小学校における取り組みについて討論していただく予定です。

シンポジウムのテーマは「日本と中国における環境教育のパートナーシップ」ですが、特別講演の王宗敏先生にも加わっていただいてフロア - の皆様方とともに楽しく討論・意見交流をいたたく考えています。

時間：計3時間30分

14:20 - 14:30：コーディネーターから、シンポジウムの進め方とシンポジスト紹介（10分）

14:30 - 14:50：田先生（20分）

14:50 - 15:10：宗先生（20分）

15:10 - 15:30：浅野室長（20分）

15:30 - 15:40：休憩（10分）

15:40 - 16:00：和田先生（20分）

16:00 - 16:20：本庄先生（20分）

16:20 - 17:00：シンポジスト相互の意見交流（40分）

17:00 - 17:10：休憩（10分）

17:10 - 17:50：フロア - の参加者を交えて座談会（40分）

中国の大学における環境教育の現状について - 総合的学習の視点から -

田 徳祥

北京大学 教授

環境教育教研室主任 1938年5月18日生

- 一．はじめに
- 二．大学における環境教育に関する現地調査 16校を考察の対象として
- 三．大学生の環境意識に関するアンケート調査
- 四．調査の結果と評価
 - 1．緑色大学を創立する必要性（ハルピン工業大学の例を挙げて）
 - 2．自然フィールドを活用する環境教育の重要性（ハルピン工業大学の例）
 - 3．環境教育の教材編さんとビデオ・スライドの活用（北京大学の例）
 - 4．中学校における環境教育を支援すること（北京師範大学の例）
 - 5．今のところ、中国の大学での環境教育は未だに不均衡である
 - 6．大学生に対する環境教育が普及されていない
 - 7．環境保全を主旨とするクラブ活動は少数の大学では相当活躍している
 - 8．環境教育を専攻しない大学生に対する環境教育を強化すべきである
そのために、環境教育を必修科目として全ての学校と学部で推進する
教師の研修と交流を一層強化すべきである
予算を増加し、総合的学習と実際の体験の機会を作る
- 五．環境教育に関する国際合作と情報交換が大変重要である

私の考える砂漠化と黄沙あらし問題 - 総合的学習としての環境考古学の立場から -

宋 豫秦

北京大学 副教授

北京大学環境科学中心副教授、生態教研室主任 1953年9月9日生

近年、中国では、土地の砂漠化が日ごとにひどくなってきて、黄沙あらしも度々発生することが国内外の注目の的になっている。

1. 深刻化する砂漠化問題

- a 砂漠と砂漠化は二つの異なる概念である。砂漠と砂漠化の面積は各々中国全土の六分の一を占めている。
- b 不合理的な耕作や放牧による土地の過剰使用は砂漠化を招く。それによる自然生態系への影響が今深刻化している真っ最中である。それに対抗するため、植林によって保護林をつくる努力がなされているが、一旦砂漠化が発生し始めると、土壌の劣化が加速的に進行し、それを止めることは容易でない。

2. 環境考古学の視点から見る文明の盛衰と砂漠化との関係

中国で最初に発生した黄沙のあらしは、歴史の記録によると2000年前のことであった。

3. 今後の課題と展望

日本における環境教育政策 - 日中のパートナーシップ -

浅野 能昭

環境省総合環境政策局環境教育推進室 室長

< 参考資料：環境省地球環境局環境協力室 HP より >

第4回日中韓三カ国環境大臣会合

1. 概要

2002年4月20日（土）～21日（日）において、ソウル（韓国）で「第4回日中韓三カ国環境大臣会合」が開催され、日本からは大木環境大臣が出席した。

会合に先立ち、李 漢東（リ はんどん）韓国国務総理を表敬し、歓迎を受けた。

今回の会合では、ヨハネスブルグサミットへ向けた取組、気候変動問題、最近関心を集めている黄砂の問題や中国北西部の生態系修復といった北東アジア地域の地域的な問題について議論を行った。また、本会合の下で3カ国の協力のもと、環境教育、環境産業、合同研修などの現在行われているプロジェクトについてのレビューを行った。

気候変動問題に関しては、ヨハネスブルグサミットに向けて、日中韓三カ国としてアジアの意見が十分反映されるように取り組んでいくことで意見が一致し、中国政府、韓国政府とも京都議定書の締結に前向きに取り組んでいることを確認した。

また、黄砂問題について活発な議論がなされ、今後、三カ国がセミナーや研修、調査研究などを通じ貢献していくことで一致した。我が国は、本年秋に黄砂問題や生態系修復についての三カ国の専門家会合を開催することを表明した。

これら会合の結果を共同コミュニケとして採択し、閉幕した。

2. 経緯

日中韓三カ国環境大臣会合は、北東アジアの中核である日本、中国、韓国の3カ国の環境大臣が一堂に会し、本地域及び地球規模の環境問題に関する対話や協力関係を強化するため、1999年（平成11年）より毎年、3カ国が持ち回りで開催している。1999年の第1回会合は韓国、2000年の第2回会合は中国、2001年の第3回会合は日本で、それぞれ開催された。

昨年4月に東京で開かれた第3回会合では、プロジェクトの形成及び実施、気候変動問題などの共通関心事項などについて意見交換が行われた。現在、3カ国の協力のもと、環境教育、環境産業、合同研修などのプロジェクトが進められている。

大学における副専攻『環境論コース』の教育実践 —大学での総合的環境教育の試み—

和田 武

立命館大学産業社会学部 教授

1. 今日の環境問題の特徴と大学教育

今日の環境問題は、従来の「公害」と異なるいくつかの特徴をもっている。まず第1に地球温暖化などに代表される地球規模の広がりをもつ環境破壊を含み、その進行は不可逆的環境変化をもたらし、すべての人間を含む生物の健全な生存そのものを脅かすものであることである。第2にその原因は「公害」のように特定の工場などに限定されるものではなく、人間の生産活動や生活様式などを含む社会のあり方そのものにより、これまでの「持続不可能な社会」から「持続可能な社会」への転換が不可欠であることである。

したがって、環境問題の克服は人類共通の最重要課題であり、そのためには環境破壊についての現状認識や未来予測を踏まえながら、危機的状況に陥るのを防止するために、科学技術、生産体系、社会制度、生活様式、文化のあり方など、あらゆる人間活動が見直され、早急に「持続可能な社会」の構築を実現しなければならない。そこで自然科学的環境認識に基づく危機意識をすべての人々が共有し、真剣に自らの生活や社会のあり方を見直し、持続可能なものに変革するための実践に結びつけて行かねばならない。

そのための環境教育がいま求められているわけであるが、それはあらゆる分野の科学的認識に基づく総合的、統合的な内容を備えるべきことが上述のことから理解できる。ところが、これまでの大学は、理学、工学、農学、経済学、経営学、法学、文学などの自然、社会、人文科学の個別分野に基づく学部をもち、さらに細分化された学問領域からなる学科を学部のなかにおく専門教育システムが主流となっており、総合的教育には適さない状況に置かれている場合が多い。そのような大学の現状を踏まえながら、総合的環境教育を実施する方法を創出しなければならない。

2. 大学における総合的環境教育の試みとしての副専攻『環境論』教育実践

大学の個々の学問領域と環境的認識を総合化あるいは統合できる教育のひとつの方法としては、専門教育以前に実施される教養教育や一般教育などのなかに関環境関連科目を設置する

ことである。現在、日本のかなりの大学に「環境問題」や「環境論」のような科目が置かれている。しかし、この場合、体系的に環境を学ぶという点ではまだまだ十分とは言えない状況にあるようである。

立命館大学では、そのような欠点を克服し、各学部の学生たちが自らの専門と並行して環境について総合的により高度に学ぶ「副専攻・環境論コース」を設置し、教育実践を行ってきた。このコースで学ぶ学生たちが「環境」を自分の専門に組み込み、それぞれの学問と環境との総合的、統合的発展を図ろうとする試みである。衣笠キャンパスの「副専攻・環境論コース」は、定員が100名で、法学部、産業社会学部、文学部の3学部の2回生以上の希望者が選択して他学部生と共に学ぶ場となっている。コースには2回生担当科目として「環境と人間1(地盤の環境)」「環境と人間2(水文の環境)」「環境と人間3(気候・大気環境)」「環境と人間4(生物環境)」「環境と社会1(都市・経済・社会)」「環境と社会2(都市・経済・社会)」の6科目があり、さまざまな自然環境変化やその原因となる社会的側面について学び、3回生担当科目として「環境倫理学」「資源エネルギー論」「環境法1(環境法の展開と課題)」「環境法2(今日の環境問題と法の役割)」の4科目が置かれ、持続可能な社会を構築するための倫理や制度などについて学ぶ。いずれも半期2単位科目、全20単位のうち、16単位以上を修得しなければならないことになっており履修生は環境に関する一定のまとまりをもった学習が可能である。

コース終了時に受講生アンケートを実施している。受講動機の8割が「環境に関心がある」、15%が「将来、役立つ」、2%が「大学院進学のため」としており、積極的理由が大部分であり、出席率も15回の講義のうち欠席が2回以下が7割以上と高い。また、「授業内容に関心をもてたか」「受講は将来、役立つと思うか」「受講して満足しているか」などの問いに対する肯定的回答が85-92%に達している。感想文のなかでも、それぞれの専門科目と結合して新たな視点を獲得している様子もみられ、卒業後に環境関連の仕事を選ぶ者も見られ、本コースの実践はほぼ成功しているものと思われる。

小学校における環境教育の総合的学習 - 『川と人びとの暮らし』の実践から -

本庄 眞

香芝市立真美ヶ丘東小学校 教諭

（1）はじめに

昨年、「総合的な学習」の時間を使って、『川と人びとの暮らし』というテーマで4年生の子どもたちと取り組んだ。この取り組みをふりかえりながら、「総合的な学習」について感じていることや私自身の考えを書いてみたいと思う。私の学校の校区には、葛下川という大和川（毎年全国水質汚濁のワースト1～3位に入る川）の支流が流れている。校区は葛下川の中流に位置し、川の上流には靴下工場がある。ときどき川が真っ黒になっていることもある。汚濁がかなり進んでいることは、見た目にも、川の臭いからもよく分かる。川の中には様々なゴミが散乱している。川はコンクリートの護岸で被われ、川へ下りられる場所も見当たらない。20年以上個人的に川に関わり続け、学校の授業でも取り扱ってきたが、この葛下川の様子を見てみると積極的に授業の中で川に入りたいという思いになかなかならなかった。

（2）学習の流れ

5月、現在工事中の吉野郡川上村にある大滝ダムの見学から『川と人びとの暮らし』の学習がスタートした。子どもたちの作文を読むと、ダムの見学内容よりも、川に直接入って生き物探しをしたことが子どもたちの心に強い印象を与えていたことが分かった。こうなると、地元の葛下川はどうなのだろうという疑問や欲求が当然出てくる。やっと、地元の川に向かう気持ちが自分の中にも湧いてきた。予想を越えて、この汚れた葛下川での調査を子どもたちは喜んだ。あとは、上流や下流・水源の探検、川のゴミの分別、市役所への聞き取り調査、地元の古老への聞き取り、大滝ダムの下に沈む村の人への聞き取り調査、吉野川分水の調査、ため池の調査、葛下川の未来像の作成 子どもたちのやりたいということ・私自身がやってみたいことを、伸び伸び自由に行なった。

（今回の学習における子どもたちの感想例や指導計画などの詳細は別紙資料を参考にして下さい。）

（3）学習をふりかえって

今回の「総合的な学習の時間」をふり返ってみたい。

身近な葛下川の生き物などの環境調査・ゴミの分別などの直接体験によって、『自分とのかかわり』が生まれる。この『自分とのかかわり』が、「葛下川はどこから汚れるのか。」「なぜ川が汚れるのか。」「川をきれいにしたい。」などの問いや行動を生み出した。子どもたちの『主体的な問いと行動』をどのように促すのか？ということは、今の教育に最も必要な点であると思う。これは、インターネットだけの調べ学習で

は、なかなか生まれてこないのではあるまいか。

地域の老人の家に聞き取りに出かける。「葛下川に昔ウナギがいたなー。」「タニシを濡れたむしろにはさんで生かしておいて、蒸して食べていたなあ。」「シジミは、砂出しをして朝食の汁に必ず入っていた。ドブガイも食べていたなあ。」「ヌマエビは、ネギと酢味噌和えにして食べていたなあ。」「川や池で泳いで死んだ人もあったけど、先生に叱られても泳いでいたよ。」「水不足で、(野)井戸を掘ってたよ。水を汲むのによくお父さんの手伝いをしてたよな。」話す人も生き生き。聞いている子ども達も本気になってくる。これは、「自然と人間」を一つのテーマにしている私自身にとっても、貴重な一つの話だった。大滝ダムの下に水没になる川上村の人への聞き取りは、子どもたちに深く考えさせる何かがあった。一つ一つの言葉が重かった。まず、教師自身がやってみたいことをする、教師自身が楽しむ、教師自身の問いを大事に学習を進めた。『人との関わり』が、子どもも私も本気にさせた。

吉野川分水を詳しく調べだす子も出てきた。私も葛下川をもっと知りたくなってきた。子どもたちと行った市役所の人たちは、以外に(?)親切だった。市役所からもらった20年にわたるBOD・COD・透明度・シアンなどの分厚い調査データを解析すると、地域の老人から聞いた話とほぼ一致することが分かった。この校区の上流にはいくつかの靴下工場がある。この市を支える一つの大きな企業であるが、水を汚している一つの大きな原因にもなっている。水の浄化のための設備投資には膨大な費用が負担になる。靴下工場で働く保護者もいる。企業努力あるいは企業責任を学習の中で、どのようにおさえるのか。このあたりをどうクリアするかが目下の課題である。子どもたちとお金の問題(経済)にも、向き合っていかなばならなくなった。

この学習を通していろいろな新しい発見や気づきがあり、私にとっては、「総合的な学習の時間」は至福の時間だった。子どもたちも「総合の時間が楽しい。」という感想が聞けた。これだけ、領域の異なる学習を自由に、気兼ねなく行なえるというのは、やはり「総合的な学習」のお陰かなと思える。「総合的な学習」に私が期待する一つは、専門領域を越えた学習(学問)の追及を自由に行なえることである。川の環境問題を解決していくには、社会科学・自然科学などの専門領域を越えた総合的な視野に立った学問の連携(パートナーシップ)が必要になることは言うまでもない。同時に、研究者・行政・学校・地域・市民団体などの連携が必要になる。私が、川の教育実践を始めた20年前の頃に比べて、全国各地で川の実践報告は格段に多くなったと思う。種々のパートナーシップが得られやすくなったのも一つの要因だと思う。しかし、果たして現実の川の実態はどの程度よくなったのだろうか?川と子どもがどれだけ近くなってきたのか?『子どもと自然のつながり』の危機的状況は更に深刻になってはいないだろうか?という思いもある。

(4) まとめ

この実践を通して、私自身が学んだことをまとめてみたい。環境学習において、子どもたちの『主体的な問いと行動』を促すには、次の2点が重要であると思う。豊かな直接体験を通して、『環境と自分とのつながり』をつくる。『人との出会い』を通して心情面をゆさぶる学習場面を設定する。